

ミシガン大学の東南アジア研究

西 原 正*

アメリカは中西部にひろがる広大な農地帯の中に存する小さな大学町アナーバーは、ミシガン大学の所在地として、日本の大学人には比較的好く知られているが、この大学の東南アジア研究は、それほど知られてはいないようだ。この大学からは、まだコーネル大学の Kahin やロンドン大学の Hall に比類される東南アジア研究者が出ていないと共に、東南アジア研究の歴史が浅いことも、その理由であろう。過去5カ年間ミシガン大学に学んだ者として、同大学の東南アジア研究について素描と観察を試み、他大学の同類研究体制との比較参考資料としてみたい。

1930年代にフィリピンが米国の統治下にあった時、ミシガン大学の政治学部教授 Hayden 氏が副総督を務めたこともあって、大学図書館には戦前のフィリピン関係資料が豊富に収録されてある。また1950年代には同じく政治学部の Heady 教授（現在ニューメキシコ大学総長）が、フィリピン大学の行政学部設置の指導にあたったこと等から両大学の関係は緊密であった。しかし東南アジア研究が具体的に

* Graduate student, Department of Political Science, University of Michigan

軌道に乗ったのは1961年であった。その年、大学内に Center for Southern Asian Studies という Center ができ、1964年に改名されて現在の Center for South and Southeast Asian Studies となった。その名の示すごとく、東南アジア研究は南アジア研究と統合されて発展した。** それ以来 Center は大学の各学部属する東南アジア研究者間の交流を深め、資料収録や渉外事務の処理などの統一的運営を行ない、さらに後継者養成のための長期計画を立てる、調整連絡機関としての役目を果たしてきた。研究活動資金は、米国の Department of Health, Education, and Welfare の Office of Education とフォード財団の援助でまかなわれているが、独立した研究機関ではない。組織上は、大学の College of Literature, Science, and the Arts という、大学の中心的総合学部（この中には、一般の人文社会科学の学部が入る）に属する。従って Center に関係する教授は、Center 直属の教授ではなく、各専門学部より任免を受けることになる。各種の東南アジア関係の講義も Center が主催するのではなく、各学部のコースとして登録されている。Center はこうした講義の内容の調整や教材の準備や教授の外部からのスカウト、また関係学部と調整により教授の給料の一部または全額負担引受け、学生の奨学金の世話など、全体として、東南アジア研究体制が順調に運ばれるよう面倒をみる事務所である、とあってよい。

教授の紹介

まずここに集まる教授陣の紹介から始めよう。Center の教授陣は、1968—69年度で計41人であるが、そのうち、東南アジア地域の専門教授は、次の表1が示す13人である。これ以

** 以下には Center の東南アジアに関係した部分のみを紹介する。Center 全体の活動の紹介ではないことをご了解いただきたい。

表1 ミシガン大学 東南アジア

	出生年	Ph. D. 修得大学
文化人類学		
Burling, Robbins	1926	Harvard
Yengoyan, Aram A	1935	U. of Chicago
地理学		
Clarkson, James D.	1932	U. of Chicago
Gosling, L.A. Pete	1927	U. of Michigan
歴史学		
Steinburg, David J.	1937	Harvard
Wyatt, David K.	1937	Cornell
言語学		
Becker, Alton L.	1932	U. of Michigan
Gedney, William J.	1915	Yale
民俗音楽学		
Becker, Judith O.	1932	U. of Michigan (M.A.)
Malm, William	1928	UCLA
政治学		
Fifield, Russell H.	1914	Clark Univ.
Smith, Roger M.	1930	Cornell
社会学		
Ness, Gayl D.	1929	U. of California Berkeley

外にも Center に関係したスタッフ（例えば、図書館員）はいるが、ここでは講義をもって教授のみ扱うことにする。この表は、教授名と、出生年、Ph. D. 修得大学と修得年（1人は例外で M.A. のみ）、専門対象国、および主要講義題目を一覧表にしたものである。各人は、この代表的講義以外に、学部学生向けおよび大学院学生向け、また時には大学院でもセミナー、準セミナー（この説明は後です）向けにも講義をもっており、ミシガン大全体での東南ア関係のコースは、1968

—69年では57コースが数えられる。普通、数人の教授が交替で休職して現地調査に出かけるので、実質コース数は40くらいである。ミシガン大学は3学期制で、そのうち夏学期はアジア関係のコースは少ないから、残りの秋、冬の2学期で40コースを教えることになる。

表1をみてまず気づくことは、教授陣が非常に若いことである。1929年以降出生した、現在30才台の教授が半分以上（7人）おり、40～45才が4人で、併わせて、45才以下が13人中11人を占めている。そしてこのうち、10

関係教授リスト（1968-69年度）

Ph. D. 修得年	専門対象国	代表的講義題目
1958	ビルマ	Language and Culture Tibeto-Burmese Linguistics
1963	フィリピン	Ethnologies of SE Asia Peoples and Cultures of SE Asia
1967	マレーシア	Geography of SE Asia
1958	マレーシア・タイ	Geography of SE Asia
1964	フィリピン	Modern SE Asian History, Insular SE Asia, US Relations with Pacific
1966	タイ	SE Asia to 1300, SE Asia from 1300 to 1824, Mainland SE Asia
1967	タイ・インドネシア ビルマ	Thai, Indonesian, Malayo-Polynesian Linguistics
1947	タイ	Linguistic Typology of SE Asia Structure of Thai
1968	ビルマ・インドネシア	Music Cultures of Asia, Africa and the Pacific
1959	マレー・インドネシア	Music Cultures of Asia, Africa and the Pacific, Ethnomusicology
1942	全地域	International Relations of SE Asia International Relations
1964	カンボジア	Government and Politics of SE Asia
1961	マレーシア シンガポール	Social Aspects of Economic Develop- ment, Sociology of Modernization

人は1958年以降に博士号を修得している。このことは、ミシガン大学の東南アジア研究が大きな将来性をもっていることを示している。次に専門分野についてみると、社会科学および人文科学の専門分野はいちおう包括され、両分野の教授数も均衡がとれている。もっとも経済学、教育学、さらには哲文関係のスタッフが欠けているが、これは1969—70年度には補完されることになっている。

同じ東南アジア研究者といっても、各人の研究対象国はたいてい2カ国であるから、こ

の点からミシガンの教授陣をみると、タイ、マレーシア・シンガポール、フィリピン、ビルマ、インドネシア、カンボジアの6カ国に関する専門家がいることになる。最近の著作活動を中心に紹介しよう。タイの専門家としては、言語学者の Gedney 教授と A. Becker 教授がいる。前者はタイ語教育に熱心で、*English for Speakers of Thai* (in Siamese) American Council of Learned Societies, 1956. という共著がある。後者はタイ語の他に、インドネシア語、ビルマ語も教える。

“Burmese Tonemics” (*Papers of the CIC Far Eastern Language Institute*, Ann Arbor, 1965) という論文を書いている。タイ史の学者としては Wyatt 教授がおり、19世紀以前が特に専門で、最近“Family Politics in Nineteenth Century Thailand” (*Journal of Southeast Asian History*, 1968) を発表した。同氏は1969年よりコーネル大に転任する。

マレーシア、シンガポールに関しては、まず地理学者の Gosling 教授と Clarkson 教授がいる。兩人ともマレーにおける華僑の定着状況や同化過程に関心を寄せてきた。例えば、Gosling の “The Assimilation and Acculturation of Early Chinese Settlements in Northeast Malaya” (*Essays on Malaya and Indonesia*, Oxford Univ. Press, 1964) および Clarkson の “The Cultural Ecology of a Chinese Village (Cameron Highlands, Malaysia)” (*Univ. of Chicago Geography Research Series*, 1968) を参照。もっとも Gosling 氏は過去数年はタイの河川利用調査に従事している。社会学者の Ness 教授は、経済発展との関連において後進国の社会学的分析を行っており、特にマレーシア政府の経済発展計画に注目して、*Bureaucracy and Rural Development in Malaysia* (Berkeley, 1967) を著わした。

フィリピン研究家としては、文化人類学の Yengoyan 教授 (“The Initial Populating of the Philippines: Some Problems and Interpretations,” *Studies in Philippine Anthropology*, 1967) と歴史学者の Steinburg 教授がいる。氏は、フィリピンにおける日本軍政協力者の研究をして、*Philippine Collaboration in World War II* (Univ. of Michigan Press, および Solidaridad Publishing House, Manila, 1967) を出版した。これについては、フィリピンの現役政治指導

者を刺激したとの説もある。ビルマ研究家としては、文化人類学の Burling 教授と Becker 教授夫妻がいる。前者は *Hill Farms and Padi Fields, Life in Mainland Southeast Asia* (Prentice-Hall, 1965) の著にみるように、ビルマだけでなく、アジア大陸東南部の種族集団の生態の研究をしており、後者は言語、民俗音楽、演劇など、広くビルマ文学、芸術の研究をしている。夫人は “The Migration of the Arched Harp from India to Burma” (*The Galpin Society Journal*, March 1967) という論文を書いている。

インドネシア専門の社会学者はいないが、上述の Becker 教授がインドネシアの大学院学生への援助を得て、インドネシア語を教えている。カンボジアの研究者はアメリカにも少ないが、その数少ない学者の一人 Smith 教授が1967年ミシガン大の政治学部に招かれてきた。カンボジアに数年住んで、カンボジアの国家利益の観点から同国の外交の分析を試み、*Cambodia's Foreign Policy* (Cornell Univ. Press, 1965) を著わした。余りにも親カンボジア的だとのかどで、タイにはしばらく入れなかったとのこと。本人も「カンボジア・ナショナリストだ」と自認しているくらい。

これら6カ国についての専門家以外に、東南アジアの国際関係を専門に研究しているのが、政治学者の Fifield 教授。同氏は東南ア外交史の分野では先駆者であり、1958年に *The Diplomacy of Southeast Asia: 1945-1958* (Harper) を著わし、その後、1963年に、*Southeast Asia in United States Policy* (Praeger) および C. Hartschaaf と共著で *The Lower Mekong: Challenge to Cooperation* (Van Norstrand) を書いた。前者は邦訳されている。また東南アのマレー民族地域を巡って民俗音楽をテープに集め、特異な講義をしている Malm 教授がいる。氏は本

表 2 分野別、志望学位別にみたミシガン大学の東南アジア専攻大学院学生状況（1967-68年の調べ）

専攻分野	大学院学生数			奨学金受給 学生数
	修士課程	博士課程	計	
文化人類学	—(—)	1(1)	1(1)	1
経済学	—(—)	—(—)	—(—)	—
比較教育学	1(1)	2(—)	3(1)	2
極東研究	10(4)	—(—)	10(4)	1
地理学	—(—)	7(2)	7(2)	5
歴史学	1(1)	6(—)	7(1)	1
言語学	1(1)	5(3)	6(4)	4
美術史学	—(—)	—(—)	—(—)	—
政治学	3(—)	16(1)	19(1)	10
社会学	2(—)	8(3)	10(3)	4
社会心理学	—(—)	1(—)	1(—)	—
社会事業学	—(—)	—(—)	—(—)	—
計	18(7)	46(10)	64(17)	28

注 1) カッコ内は女子の数。

2) Center の記録不十分のため数字には多少の加減がありうる。

来は日本音楽の研究家で *Nagauta : The Heart of Kabuki Music* (Tuttle, 1963) を書いている。

これら教授連の研究調査意欲も旺盛で、例えば、今年度は Burling と Gedney 教授が各専門国に赴いており、昨年度は Gosling, Clarkson, Malm の3氏が、それぞれタイ、マレーシア、インドネシアに調査に出かけた。1969—70年度には、Becker 教授夫妻がインドネシアで、Ness 教授がマレーシアとフィリピンでの調査に入る。Fifield 教授は目下、1945年以降の米国の対東南ア政策を再検討した分厚い書を執筆中。先述の新進で野心家タイプの Steinburg 教授は、フォード財団の援助を得て、同僚数人とチームを構成して、東南アジア史を共同執筆する計画をすすめている。このチームには、David Chandla (カンボジア史専門)、William Roff (マレー史)、John Smail (インドネシア史)、Alexander Woodside (ベトナム史)、および David

Wyatt (タイ史) らが加わるとのことである。

Malm 氏は「タレント教授」なる言葉がピッタリくる学者で、「祭ばやし」や獅子舞を学生の前で演じてみせるかと思うと、数年前には、東南アジアの民俗音楽に関心を示し、Mrs. Becker 教授と、ガメロン同好会を結成した。大学にはガメロン・オーケストラの楽器一式が揃っており、同好会員も50人に達している。去る2月にはコンサートを盛況のうちに催した。この Malm 教授とは対照的な温厚で口数少ない Smith 教授も仕事に関しては劣らず意欲的である。東南アジアにおいて、東南アジア人による東南ア研究が発展するよう、その育成援助の任をフォード財団より受けてバンコクで仕事を始めた。このために、1969—71年の2年間は研究生活を犠牲にする予定である。Ness 氏が中心になって、マレーシア研究に従事する教授が、最近同国を紹介する教養テレビ番組を編成し、ミシガン大学テレビ局から放送している。

Smith 氏のように、研究調査以外の行政的
活動の分野でも、東南ア研究関係の教授は大
いに貢献している。Steinburg氏は会員4,300
人を有する世界最大のアジア研究学会といわ
れる Association for Asian Studies (AAS)
の事務局長であり、Yengoyan 氏は、この協会
の発行する季刊誌 *Journal of Asian Studies*
の Book review editor であり、この協会の中
で Interuniversity Southeast Asia Com-
mittee の設置のために主役を果たしたのは
Ness 氏であった。政府の国際開発局 (AID)
の諮問機関として、Southeast Asia Devel-
opment Advisory Group (SEADAG) とい
う、アメリカの東南ア研究にたずさわる社会
科学者で構成されるグループがあり、Ness 氏
はこのグループの事務局長をしている。他方、
Fifield 氏は1967年夏ミシガンで開かれた第
27回の International Congress of Orienta-
lists の事務局長を務めた。Gosling 氏は地
理学部長をしたことがある。

研究者の養成

ではこうした教授陣を擁する Center は学
生たちにどのような学問的恩恵を与えているだ
ろうか。もちろん、学生への「学問的恩恵」
をどういう尺度で計るかということは難しい
が、仮に東南アジアに比較的強い関心を示
す学生の数で考えてみよう。まず第1に、
Center の学生がつくった Southeast Asia
Club というのがあって、毎週金曜日の昼食
時に、各分野の教授や訪問中の学者、政府高
官を囲んで、非公式な昼食討論会を行なうが、
この会に出席する学生数が、一応東南アジア
に関心を寄せる者を調べる尺度になろう。19
67—68年度の出席者名簿によると、約130人
の名が載っている。このうち8割の約100人
が大学院の学生であるが、この中には南アジ
アにのみ興味をもっている者も入っている。

この約100人の学生を調べてみると、東南

アで学位を修得しようとする者は64人（うち
女子学生は17人）で、そのうち修士課程の学
生は18人（うち女性7人）、博士課程の学生
は46人（うち女性10人）という数字がでる。
その専攻分野別分布と何らかの形で奨学金資
金を受給している者の分布を表2にしてみた。
これによっても分かるごとく、政治学、社会
学、地理学、歴史学専攻が多く、現在のアメ
リカ人学生の東南アに対する関心分野を知る
目安の一助となろう。

表2はまた、Ph. D. 志望者が M.A. 志望者
と比べて圧倒的に多いことを示している。こ
れは大学自身が、大学院教育では Ph. D. 修
得志望者に重点を置いている結果による。事
実、28人の奨学金受給者の9割以上が Ph. D.
志願学生である。この28人の学生の中で、
Center から何らかの形で学資援助を受けて
いる者は、1967—68年度で5人しかいなか
った。残りは全部、学部か政府の奨学金である。
先述のごとく Center は、資金的には、学生
よりも教授の研究助成に重点を置く方針をと
っている。この点での、Center の学生に与
える物質的恩恵には限界があることが分かる。
しかし Center が、学生の奨学金獲得のため
に、全面的援助をしていることは、軽視され
るべきではない。

では知的恩恵はどうであろうか。この点の
測定も困難であるが、例えば、Center に関
係した学生で Ph. D. 論文を書いた者が何人
いるか、を調べることによって一つの目安を
つけることができる。しかし、この点に関す
る正確な資料がないので、ミシガン大で東南
アジア地域に関する Ph. D. 論文 (Center が
指導したかどうかにかかわらず) を、筆者が
大学の図書館の記録をもとに調べて、表3を
作成した。

この表は1955年以降のミシガン大で受理さ
れた Ph. D. 論文を専攻分野と提出年別に分
布させたものであるが (1945—55年には一論

表 3 ミシガン大学に提出された東南アジア関係博士論文 (1955年以降)

	1955	1956	1957	1958	1959	1960	1961	1962	1963	1964	1965	1966	1967	1968	1969-71 (予定)
文化人類学											○				
経済学	○				○				●						
教育学						●	●		●			●			1
極東研究							●								
地理学		●		○				○							3
歴史学															2
言語学										○		○		○	1
政治学	●				●		●	●	●						11
社会心理学														○	
社会学															3
計	2	1	0	1	2	2	3	2	2	1	1	2	0	2	21

	1955-61	1962-68	1969-71 (予定)
アメリカ人学生 ○	3	6	17
アジア人学生 ●	8	4	4
計	11	10	21

資料：1955-68年はミシガン大学図書館の記録による。
1969-71年は関連教授との会話より。

文も提出されていないようだ)、興味深い事実をいくつか示している。まず、1955—68年の14年間で二分してみると、前半のCenter設立(1961年)までの7年間の論文が11で、後半の7年間の数は10となる。1962年以降に提出された論文をすべてCenterの産物とみなしたとしても、この論文数だけで判断する限りでは、Centerの貢献度はゼロということになる。ところがCenterの1969年—71年のむこう3年間の論文予定数は少なくとも21となっている。これは決して大げさな数字ではない。目下、論文を書いている者が少なくとも10人、論文の資料収集のため現地調査にしている者が少なくとも3人、今夏より現地調査に出かける者が少なくとも8人、計21人が数えられる。また前掲の表2のPh. D.

志望者46人のうち、2分の1が論文を完成させるとしても、約23の博士号が誕生することになる。この事実は貴重である。この種の組織の評価は10年くらいを単位にしてなされるべきことを示唆しているようだ。

表3の示す今一つの興味深い点は、前半期に比べて後半期ではアメリカ人学生のPh. D.修得者が倍増していることである。前半期では、アジア人即ち外国人学生による博士号が圧倒的である。これはミシガン大においてアメリカ人による東南アジア研究が着実に伸びていることを示しているようだ。ちなみに、1969—71年に期待されている少なくとも21論文のうち17論文まではアメリカ人学生によって占められる予定である。かくCenterの学生に与える知的恩恵は多と考えられるべきで

あろう。

さて Center の研究体制の評価をもう一步進めて、後継者養成の制度はどうだろう。このために、まず、学生が東南アジアについて Ph. D. 論文を書くに至る過程を簡単に述べるのが適切かと思う。これには6段階がある。第1段階として、ミシガン大学では、人文社会科学部門の一般総合講義として、大学1、2年生向けに“Asian Studies”という講義を設けている。このコースは中近東から極東までの、文字通りアジア全域にわたり、しかも1年間で過去2000年の歴史を、政治や経済ばかりでなく、宗教や文化、さらにはアメリカの対東南ア政策にいたるまで、扱っている。つまり、こうしたコースによってアジア研究の入門的知識を施し、各学生に将来の専攻への準備をさせるわけである。このコース編成には従ってアジアの各地域研究センター、例えば Center for Japanese Studies, Center for Chinese Studies, Center for Near Eastern and North African Studies に関係する教授が協同で毎年の講義方針やテキストの選択に当たっている。

このコースの学生数は約200人。毎週4時間のコースのうち、3時間は各テーマに専門の教授が出向いて講義をし、残りの1時間は全体を10くらいのグループに分け、各グループに大学院の学生があてがわれて、助手として講義の補充をしたり、学生の質疑に応じる。

このコースを終えた学生は、第2段階として、3、4年生の期間に、専攻分野および地域の点で、より限定された範囲で扱われる講義をとる。例えば、社会学教授 Ness 氏が教える Social Aspects of Economic Development とか政治学教授 Fifield 氏の担当する International Relations of Southeast Asia とか。これが表1にかかげた講義題目に相当する。この後、さらに大学院に進んだ学生には、第3段階として、第2段階と同じ範囲のテーマ

で準セミナーが設けられている。準セミナーとは講義と討論とが約同等の比率で行なわれるコースで、ここでは学生はそのテーマに関しての基本的文献に目を通し、それらを基礎に30頁前後の論文を書かされる。準セミナーで発表させられることもしばしばある。この基本的文献は多くの場合英語で書かれたものであってよいのであるが、第4段階では、出来るだけ原語の文献や資料に接し、研究論文を書かされる。これがセミナーであって、この段階では教授の知らぬことを学生が知っていることも多く、学生は独立して研究調査を行なう能力がどれほどあるかによって評価される。筆記試験などはない。クラスも必ずしも毎週あるわけではなく、また場所も教授宅に移して、グラスを傾けながら議論を交すことが多い。

この段階を踏んだ学生は、これまでの知識を総合的に整理し、観察力と分析能力を身につけ、Ph. D. 論文を書く資格試験を受ける。これが第5段階で、qualifying examinations とか preliminary examinations とか、または俗に prelims といわれている。そしてこれに合格した者が、いわゆる Ph. D. Candidate という資格をもらい、最終段階としての博士論文書きに入るわけである。

この6段階の過程で留意すべきことは、Center はいずれの段階においても直接的責任は何ら持たないということである。Center は学位を授与しない。Center の任務は、学生の勉学方針の指導、論文資料収集の援助、奨学金の斡旋、などの大学側からみれば側面的に見えるかもしれないが、当の学生にとっては、また東南ア研究者を養成するためには、不可欠のものなのである。Center が学生に出す奨学金が少ない点を除けば、ミシガンの東南ア研究者養成体制は満足できるものだといえよう。

ミシガン大学の現在の東南ア研究体制に改善されるべき点があるとすれば、それは Center の方針である専門分野主義と実際の体制との間にみられるギャップではなかろうか。この相違は組織の若さによるところが多い。ミシガン大学では、東南ア研究をしても、この地域の専攻者として学位が授与されるのではなく、歴史学、社会学などの専門分野で与えられる。従って、学生は各自の専攻する分野での方法論、理論的枠組についての知識、理解力を身につけ、それを「東南アジア」という地域に適用する、という考え方となる。

この方針を貫いて、Center は一国集中主義を避けて、東南ア10カ国中、6カ国の専門家を集めた。しかもこれらの専門家は、自己の専門分野の知識と方法論を一カ国以上に適用し、比較分析することに関心のある人たちである。従って最初に紹介した13人の教授は1、2カ国についての研究をしているが、実際には、自分の専門分野の仮説的命題、方法論、分析手段の検索に、そうした専門対象国を使おうとしている人が多い。

ミシガンは、フィリピンとマレー研究に“強い”という世評を時折耳にするが、これは必ずしも正確ではない。そういう傾向はあったとしても決してこの2国にのみ重点を置いているのではない。

ともあれ、この専門分野 (discipline) 主義をとり、しかも東南ア各国の専攻者を養成するには、東南アの主要言語を教える体制ができていくべきである。しかし実際には、タイ語とマレー・インドネシア語のみの教習だけで、ピリピノ(タガログ)語、ビルマ語、ベトナム語、カンボジア語、ラオス語等の講座はない。Center は来年度には、マラヤ大学から Rama Subbiah 教授を招いてタミール語とマレー・インドネシア語文化の研究強化を計り、South and Southeast Asian Languages and Literatures という小分野を言語学部

に設けて、M.A. と Ph. D. を授与しようと計画している。これはこの分野を確立せんとする点では画期的なことであろう。しかし言語を研究の目的とせず手段とせんとする学生には、この新計画からの恩恵は少ない。特にタイ、インドネシア語を教えながら、両国に関する社会学者が教授陣に少なすぎるのは、研究体制の欠陥であろう。

東南アの言語学や文学の分野確立計画と並んで、Center は来年度にはもう2つの項目を方策に練り込んでいる。その1つは前述の“Asian Studies”の改良である。来年度には、このコースはアジア全域から東アジアを分離させて残りの東南アジア、南アジア、南西アジア(中近東)の3地域のみを扱うことになる。また学部学生で成績優秀な者で東南アジア、南アジアに特に関心ある学生に対して、3人ないし5人の異なった分野の教授を入れての特別セミナーを設けることになっている。

今一つの Center の方策は、Center の教授陣と大学の他の研究機関との協同研究体制の推進である。例えば、Center の社会学系教授と School of Public Health の Population Planning Center のスタッフとの合同セミナー“Problems of Population Control in South and Southeast Asia”を設けるとか、School of Architecture と合同で“Housing and Urbanization in Asia”というセミナーを設け、インドとタイでの公共住宅建築計画案を作成している建築学専攻の学生に、アジアの都市問題の特殊性を学ばせるとか、がこれである。

今一つ Center が試みんとしているものとして、「現地調査セミナー」とでもいうべき勉強方法がある。これは、Ph. D. 論文を書く資格のある学生数人が、東南アジアの一国を選び、共通のテーマながら、各自が独自の現地調査をし、定期的に現地でセミナーを開くという方法である。最初の試みとして、1969

—70年度には、政治学部と歴史学部で Ph. D. Candidate になった者6人が、社会学部の Ness 氏を主任として、フィリピンへ赴くことになっている。セミナーの教室をミシガンからフィリピンに移し、資料を大学図書館に求めずに現地に求めてのこの研究会は今後の社会科学者の研究方法を示唆しているようだ。もちろんこの方法が果たして初期の目的を果たすかどうかは、1年後をまたねばならない。

このようにみてくると、ミシガン大の東南アジア研究の今後の方向が明確になってくると思う。それは地域研究 (area study) 主義を避けて、専門分野 (discipline) 主義を基調としながら、これに分野横断的 (cross-disciplinary) アプローチを強調することによって、

従来の地域研究的アプローチとの新しい折衷をみせていると思う。

Center は、本年より3年間は、Ness 教授の後任者として、John Broomfield 教授が所長職につく。同教授はニュージーランド人で、1964年に Australian National University より博士号を取り、以後ミシガン大の歴史学部でインド史の講義を担当している。同氏の近著 *Elite Conflict in a Plural Society: Twentieth Century Bengal* (Berkeley, 1968) がこの度アメリカ歴史学会から推賞された。Ness 氏も Broomfield 氏も新しい世代のアジア研究者層を代表するもので、Center の今後の発展は注目に値しよう。

(1969年4月稿)